

講演要旨

地域は、若者を育てるだけでよいのか

— 関係が選択を生む、グローバル人材育成 —

群馬大学 特別教授・名誉教授 結城 恵

2026年7月27日（月）

中心メッセージ 人が地域を将来の選択肢として捉えるのは、制度や求人を知ったときだけではない。地域の人と関わり、自分の役割が見え、困ったときに相談できる関係が生まれたときである。

1. 人材育成と「地域を選ぶこと」の間

地域で学び、経験を重ね、成長した若者が、そのまま地域で働き、地域に力を返すとは限らない。群馬では、外国人留学生の県内就職希望が16%台にとどまり、「群馬で学ぶこと」が「群馬で働く選択」へつながっていなかった。背景にあったのは、企業情報の不足だけではない。働く人を知らない、自分の専門が生きる場所が見えない、役割を試す機会がない、相談できる相手がいない。すなわち、課題は「情報不足」であると同時に「関係不足」でもあった。

2. GHKG がつくった、切れ目のない成長の導線

グローバル人材育成事業（GHKG）では、就職支援だけを独立させず、学生が地域を知り、企業や地域の人と共に学び、働く経験を試し、振り返り、相談し、就職後もつながる導線を設計した。参加留学生の地域就職率87.5%という成果は、単発の行事ではなく、経験が途中で切れなかったことの表れである。

共に学ぶ	地域と出会う	働いてみる	振り返る・相談する	就職後もつながる
多様な視点	人と企業を知る	役割を試す	経験を言葉にする	関係を継続する

3. 日留共修——支援から、共に価値を生む学びへ

GHKGの核心は、日本人学生と外国人留学生が、教える側／学ぶ側に分かれるのではなく、共に学び、地域と関わり、価値を生み出す「日留共修」にある。学生が変わるだけではない。企業は学生の視点を事業に生かし、大学は教育を地域へ開き、自治体は人材育成を地域政策として捉える。人材が力を発揮するためには、地域側も学び、変わる必要がある。

姫路への示唆

出会いを共修へ、共修を地域協働へ

GHKG の制度やプログラムをそのまま姫路へ移すのではない。生かしたいのは、「関係が選択を生む」という原理である。対象となる年代や進路選択の段階が異なっても、人が地域を自分の将来と結びつける過程には、次の共通点がある。

1	2	3	4
地域を知る	自分の役割が見える	相談できる人ができる	地域が将来の選択肢になる

1. 出会いを「共修」へ

姫路には、中高生と外国人留学生が出会う基盤がすでにある。その価値をさらに深めるには、留学生を自国について教える人、中高生を話を聞く人として固定しないことが重要である。姫路の魅力を海外へどう伝えるか、外国にルーツを持つ人にとって暮らしやすい地域とは何か、若者が将来も姫路と関わりたいと思うために何が必要か。正解が一つではない問いを、異なる背景を持つ若者が共に考えることで、国際交流は「外国を知る経験」から「多様な人と地域の未来をつくる学び」へ変わる。

2. 共修を「地域協働」へ

共に考えたことを、地域の人や企業と試し、成果を地域へ返す。例えば、観光・地域文化の多言語発信、地域企業の商品やサービスへの提案、多文化共生や暮らしやすさの調査などが考えられる。重要なのは、立派な成果物を完成させることだけではない。若者の考えを地域が受け止め、活動に生かし、「また一緒に考えてほしい」と伝える経験である。若者は、自分が地域に価値を返せる存在だと気づき、地域側も若者や留学生を新しい視点を持つ協働相手として見るようになる。

3. 地域協働を「人材循環」へ

人材循環とは、すべての若者を地域にとどめることではない。若者が姫路の外で新しい知識や経験を得ても、姫路との関係が切れず、地域の内と外を行き来しながら、経験と力を地域へ返せる状態をつくることである。姫路で意見を受け止めてくれた人、一緒に取り組んだ仲間、困ったときに相談できる人との関係が残れば、姫路は離れた後も関わり続けられる場所となる。

結び 姫路には、すでに出会いの基盤がある。出会いを共修へ、共修を地域協働へ、地域協働を人材循環へ。若者を引き止めるのではなく、戻り、関わり、力を返せる地域へ。